

論文

立命館大学の教学マネジメントにおける IR の開発と 可視化のプロセスに関する考察

— デザイン研究の知見を分析視角として —

鳥居 朋子・八重樫 文
川那部 隆 司

要 旨

本研究の目的は、教学マネジメントを支える IR の開発及び可視化のプロセスを解明することである。特に、一義的に捉えにくい IR に対し、造形及び関係調整プロセスとしてのデザインに関する研究の知見を分析視角として用いる。具体的には、IR に関する Data の Interpretation、IR に関する Project の Implication、IR の Vision の Conceptualization の 3 つのフェーズに視点を投げ、立命館大学の事例を分析する。考察の結果、同大学における IR の開発及び可視化のプロセスの特質は、「学びの実態調査」のデータを介して、IR プロジェクトと学部の対話を「往復的」（デザイン研究で言うところの「反復」）に行い、データの「分析結果」（同「プロトタイプ」）を共有することで、教学マネジメントのアクターとしての学部の「問題関心」（同「二次的理解」）を引き出すことに成功している点等に認められる。

キーワード

Institutional Research、教学マネジメント、学習成果測定、IR の開発プロセス、IR の可視化プロセス、デザイン、立命館大学

1. 本研究の目的及び課題

1-1. 目的と問題意識

本研究の目的は、高等教育機関の内部質保証に資するような教学マネジメント¹⁾を支える Institutional Research（機関調査：以下、IR と略記）の開発及び可視化のプロセスを明らかにすることである。今日、高等教育の質保証という国際的な課題のもと、日本の大学においても根拠に基づく教学マネジメントの実効性を高めることへの要請が強くなっている。とくに、教学マネジメントの中心的な取り組みとして、学生の学習成果の測定とその結果に基づく教育改善が注目されつつある。こうした要請に対して大学がいかに主体的に応えるかは、内部質保証システムの構築につながる課題として、2011 年度に第 2 サイクルに入った認証評価の観点からも重視され

ている。つまり、PDCA (Plan-Do-Check-Action) サイクルに即した教学マネジメントを実現するための前提として、根拠に基づく教学マネジメントを支える機能としての IR を同サイクルと一体的にわかりやすく可視化し、内部質保証のアクター²⁾ の理解を促すことの重要性が高まっているのだと見てよい。IR とは、「機関の計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われるリサーチ」(Saupe, 1990, 1) である。IR は、組織のミッションや目標に応じたりサーチ・クエスチョン (いわゆる「お題」) を立て、それに即したデータ及び情報を収集・分析し、結果を内部質保証にかかわるアクターらと共有し、次期計画に反映させていくことに貢献する。これら IR の可視化に対するニーズの背景には、説明責任の観点から、高等教育へのアクセスがユニバーサル段階にある日本において、個々の大学が社会から期待される教育成果を挙げているのか否かを問う人びとの厳しいまなざしがある。

こうした状況を受け、機関レベルの「自己点検・評価」活動の蓄積や高等教育関連学会等における IR をめぐる議論の展開も相まって、日本の大学関係者の間に IR とは何かについての認識が徐々に広がってきている。とはいえ、大学の内部組織に IR の機能をいかに位置付け、その機能の発揮にどのようなアクターがかかわり、最終的にいかにして教育改善に結び付けていくのかといった実践的な課題の解決は、個々の機関の意思決定や組織文化に即しながら模索されているところであり、対応が十分とは言い難い。

そうした中、大学における教学マネジメントや IR の開発及び可視化にかかわっては、とくに諸外国に先駆けて IR が生成・展開したアメリカにおいて実践や研究の蓄積が厚い (Association for Institutional Research (AIR), 2009; Delaney, 2009; Swing, 2009 等)。ことに AIR は、IR が提供するレポートの読み手が情報に基づいた議論のための知識ストックの一員となるように、読み手とつながった内容や図表を備えた効果的なレポートを作成する方法を検討している (AIR, 2009, 2)。そこでは、IR において効果的に情報を報告することは芸術及び科学の両方であると見なされ、レポートの表やグラフが読み手を引きつけるか否かにかかわらず、情報がうまく表出された視覚表示は、読み手にとって IR 担当者が何を伝えようとしているかを理解するのに有用であり、後々活用できるよう重要な情報を覚えておくことに役立つとされている。IR の可視化が、情報伝達における単なる表示方法や様式の巧拙を超え、学内の情報活用の一翼を担う人的ネットワークの構築を目指して意図的に進められているのである。

一方、日本においては、AIR がまとめた IR ハンドブックの翻訳書 (ハワード, 2012) によって、アメリカ等において蓄積された IR の知見が紹介されている。あわせて、個々の機関における IR の萌芽的な取り組みが実践的かつ学術的な観点から検討されつつある。たとえば、沖・岡田 (2011)、鳥居 (2011)、宮浦ほか (2011)、東北大学高等教育開発推進センター (2011)、山田 (2012) では、日本の大学における IR の開発にかかわる実践が部分的に紹介されている。また、教学マネジメントにおける IR の中でも個別大学における学生調査に基づく教育改善への示唆に関しては、岡田ほか (2011)、岡田・鳥居 (2011)、Torii & Kawanabe (2012) 等の研究がある。このように、IR に関わる多様なアクターがその機能を理解し効果的に活用するための基盤として、IR の重要性に対する認識や議論が広がりつつあるが、総じて教学 IR の開発及び可視化のプロセスの全貌に関しては、実践に基づく研究成果の蓄積は薄い。

このような実状に照らし、大学の教学マネジメントを支える IR の開発及び可視化のプロセス

を追究する本研究の意義は大きく2つある。第1に、IRの連続した諸相を、まずは学内のアクターにわかりやすく伝えることを重視する点である。第2の意義は、機関の枠を超えて、IRの実践の蓄積から得られた知見やノウハウを含めて可視化していく営みを重んじる点である。すでにIRの専門学協会が活発な活動を展開している北米やアジア・オセアニア、欧州等に比して、日本ではIRをめぐる研究や実践、理論や方法等の情報を継続的かつ恒常的に共有できる場がきわめて限られており、議論の機会の創出と充実が急がれる。

1-2. 分析視角及び具体的な課題

以上の諸点から、IRの開発及び可視化のプロセスの全貌を解明することの意義は実践的にも研究的にも大きいと言えるが、重要なことはいかなる視点でそのプロセスの分析を行うかであろう。すなわち、開発及び可視化のプロセスを単なる時系列による記述で写しとることに止まらない、有効な分析視角の設定にかかわる問題である。これまでのところ、IRを正確に定義することの難しさについては、ハワードが指摘するように、IRの機能が担う役割が、機関のニーズ、願望、及びIR担当者のスキルや関心によって定まる傾向にあるということとともに、IRが活用してきた方法論が多様であることに原因が求められている。それは、IR担当者が自らの職務を遂行する上で、教育学、オペレーションズ・リサーチ、システム分析、評価論、コンピュータモデリング、プログラム予算、政策研究、アウトカム評価、計画モデル等の多数の方法論を活用してきたことに起因する（ハワード、2012、237）。かかる方法論の多彩さゆえに、高等教育機関のマネジメントにおける応用研究の一形式として記述されてきたIRの機能を十全に捕捉し得る理論枠組みの同定が困難であったと考えられる。

こうした問題にかかわって、八重樫は鳥居・八重樫（2012）における国内大学のIRの実践報告に対して、IRの一連の流れの可視化にデザイン研究の知見の適用を試みている。そこでは、4大学の実践報告を手がかりに、IRの可視化のフェーズが3つに分節されている点が注目に値する。具体的には、（1）「IRに関するDataのInterpretation」としてIRに関する調査にて得られたデータの解釈が行われるフェーズ、（2）「IRに関するProjectのImplication」としてIRに関する取り組みの公開と共有を行うフェーズ、（3）「IRのVisionのConceptualization」としてIRとは何か、IRは何に対して、何を明らかにすることができるのかを追究するフェーズである（八重樫、2012）。

本来、「デザイン」とは、色やかたちを操作する造形行為のことだけではなく、様々な文脈・立場・理念を持ったアクターから繰り出される意見・考えを踏まえつつ、ひとつのかたちある成果（広義の造形物）にまとめあげていく関係調整プロセスである。しかし、一般にはその造形的側面ばかりが強調され、造形と関係調整プロセスが不可分であることはデザインの専門分野外ではあまり語られてこなかった（八重樫、2012）。一方、デザインの可視化技術は、最終的な製品のスタイリングや美観の形成にのみ貢献してきたわけではなく、デザイナーたちの多くは常にユーザーに焦点を当て、まだ製品仕様が明確でない開発の初期段階から、プロトタイプやスケッチ等の可視化技術を利用してそのコンセプトやビジョンを表現することで、ユーザーのニーズや欲求の把握を繰り返し、製品の仕様を明確化していく³⁾。プロトタイプ等を見て意見を持つのは、製品開発プロセスに関わるさまざまな参加者も同様である。そのため、製品開発の初期段階から

開発チームのコミュニケーションを活発にし、プロトタイプを提示することによって、互いの製品に対する認識・理解の齟齬やぶれを防ぐことができる。そしてそれは、部門間の協力が重視される研究開発部門やマーケティング部門等をはじめとして (Johnes & Shelton, 1988)、コンセプト創造等の製品開発の上流から生産等の下流までコンセプトを一貫して保持することに貢献する。

このように、デザインのプロセスは、リサーチ・クエスチョンに照らしてデータ及び情報を収集・分析し、結果を内部質保証にかかわるアクターらと共有し、次期計画に反映させていく IR の諸相と類似していると捉えられ、そこにデザイン研究の知見を活かす可能性が見出せる。そこで、本稿では IR の可視化において有用だと考えられるデザイン研究の知見を分析視角として用い、大学の教学マネジメントにおける IR の開発と可視化のプロセスを考察する⁴⁾。

とくに、13 の学部にわたって約 33,000 人の学士課程学生を擁し、教学 IR の柱として学生実態調査を進めている立命館大学に着目する。立命館大学における教学 IR の機能は、同大学教育開発推進機構の特定プロジェクトである IR プロジェクトが主に担っている。同プロジェクトは、「教育開発推進機構教育開発支援センターの IR は、全学の学部・研究科・教学機関等と協働し、教学改善の意志決定に資するデータの収集、分析、報告を通じて立命館大学の『学びのコミュニティ』の成長を支援する」というミッション・ステートメントの下、2009 年度に活動を開始した。大学の改善努力を具体的に検証する教育効果の測定として質を把握することを目的に、学士課程学生の正課における学びに焦点を当てた「学びの実態調査」を開発・実施している⁵⁾。ここで得られた学生による自己の学びに対する評価において、入試方式や学年等の学生の属性データ、単位の取得状況や学業成績、プレイスメントテスト等の各種成績にかかわる教務データとあわせて分析を行うことで、リサーチ・クエスチョンに対する解を求め、データに基づく教育改善を指向している点に特徴がある (鳥居, 2011; 宮浦ほか, 2011)。

以上のように、立命館大学の IR プロジェクトは、大規模総合大学において学生実態調査の企画・実施・分析・報告を学部や教学機関等と協働して進め、学習成果にかかわるデータや情報に基づいた教育改善を段階的に推進している事例であり、IR の開発と可視化のプロセスの検証に堪え得る条件が一定整ってきていると見なせる。分析視角として、IR の開発及び可視化において有用と考えられるデザイン研究の知見を整理した上で (第 2 章)、立命館大学の取り組みを検討する (第 3 章)。最後に、これらの考察をふまえ、教学マネジメントにおける IR の開発及び可視化のプロセスの特質を明らかにし、今後の課題を導出する (第 4 章)。主な分析対象は、これまでに公表された立命館大学の教学 IR に関する論稿やウェブサイト、IR プロジェクトを中心とした学生実態調査の開発プロセス等が記された内部資料及び公開資料等である。

2. 分析視角としてのデザイン研究の知見の整理

前出の八重樫 (2012) によって提出された IR の可視化の 3 つのフェーズは、IR の一連の流れを描出する枠組みを提供している点で新規性を有するが、そこで適用されているデザイン概念の分類基準や、適用の根拠の説明は十分ではない。そこで、ひとまずデザイン概念の整理及び IR との関連性についての検討をさらに深める必要がある。以下の節では、(1) IR に関する Data の Interpretation、(2) IR に関する Project の Implication、(3) IR の Vision の Conceptualization の

3つのフェーズのそれぞれに、どのようなデザイン研究の知見が適用できるかについての検討を加え、本稿における分析視角としての有用性をさらに追求していく。

2-1. IR に関する Data の Interpretation

これは IR に関する調査で得られたデータの解釈が行われるフェーズであり、たとえば、学生に対する調査によって得られたデータから、教学に活かすための解釈を試みる位相に相当する(八重樫, 2012)。IR の可視化においては、得られたデータをどのような観点から分析し、いかに解釈するかということが前提になると考えられる。デザインにおいても、対象となる製品やサービスのコンセプトをつくる際にさまざまなデータの解釈が行われる。デザインによって生み出される価値とその思考方法を意味する「デザイン思考」においては(ブラウン, 2008)、その場で「作りながら考える (Build to Think)」ことが重要視され(ケリーほか, 2002)、コンセプトをつくるためにプロトタイプによる可視化を積極的に行うことが、製品やサービスの革新性を実現するために重要であると主張されている。つまり、迅速なプロトタイピング、検討、改善のサイクルを何度も繰り返すことによって、アイデアを洗練させていくことができるのである。また、プロトタイプを用いることによって、他者との会話が促され、自分と他者のそのモノや背景に対する解釈や理解の齟齬を実感することができ、解釈者個人の一義的な解釈を回避することができる。

これに関連してクリッペンドルフ(2009)は、デザイナーがデザインしているものに対する自分の考えを「一次的理解」と呼び、他者が理解している多様な世界の理解のことを「二次的理解」と呼んだ上で、デザインにおける二次的理解の重要性を主張している。二次的理解の対象は、独立したユーザーの個人的・主観的な理解ではなく、ステークホルダーのネットワークやコミュニティにおいて間主観的に構成される意味についての理解である(クリッペンドルフ, 2009)。よって、このフェーズで重要だと考えられるデザイン研究の知見は、(1) 迅速なプロトタイピング、検討、改善のサイクルを反復すること、(2) プロトタイプを用いることで、他者との会話を促し、個人の一義的な解釈を避けること、(3) 二次的理解を重視し、デザインのステークホルダー間の討議に参加すること、の3つにまとめられる。

2-2. IR に関する Project の Implication

これは IR に関する取り組みの公開と共有を行うフェーズであり、たとえば、調査によって得られたデータの解釈結果を、誰にどのように公開・共有すべきかを検討し実行する位相に当たる(八重樫, 2012)。IR の可視化においては、得られたデータの解釈結果をいかに見せていくか、とくにその「表現方法」が問題になると想定される。デザインはモノの審美性に大きく関わることは無視できない⁶⁾。製品やサービスにおいて、たとえ機能が同じでも、外観さえ変化させれば顧客にとっては全く新しい価値になり得る。さらに、顧客はその外観から機能性を判断することもあり、外観と機能は切り離せない関係にある(Hoegg & Alba, 2011; Townsend et al., 2011)。

ことに、モノの表現要素とその享受者の理解との関係性を浮き彫りにするには、前項で言及したように二次的理解が必要であり、デザインのステークホルダー間の討議に参加することがこのフェーズでも重要になる。さらにここでも「デザインする」ことと「ユーザーからのフィード

バックを収集する」ことを反復しながら進めることが特に重要⁷⁾であり、作業のプロセスを見通す上で大きな価値を持つと考えられる。したがって、このフェーズで重視すべきデザイン研究の知見は、(1) 表現要素と享受者の理解の関係性の評価検証を積み重ね、視覚表現の言語としての構成原理を確立していくこと、(2) 二次的理解を必要とし、デザインのステークホルダー間の討議に参加すること、(3) 「デザインする」ことと「ユーザーからのフィードバックを収集する」ことを反復しつつ作業を進めること、の3つにまとめられる。

2-3. IR の Vision の Conceptualization

これは IR とは何か、IR は何に対して、何を明らかにすることができるのかを追究するフェーズであり、IR の全貌の可視化において明らかにされるものは何かを根源的に問う位相である。クリッペンドルフ (2009) は「デザインとはモノの意味を与えること (Design is making sense of things)」と定義しているが、モノの意味は社会的・文化的な制約を受けるため、誰か特定の者が一義的に定義することはできない。クリッペンドルフが指摘するように、デザインは単に技術的もしくは合理的な問題解決活動から、個々に異なり潜在的に矛盾している興味を持つステークホルダーのネットワークやコミュニティを信頼する社会的なプロセスへと変化している。そこでデザイナーは「自分たちのプロジェクトに、ステークホルダーを参加させ、反対者を支持者に変え、一致しない視点を協議し、異なった専門家の知識を利用し、人工物の開発を先に進めるために、ステークホルダーを信頼する必要」(クリッペンドルフ, 2009, 72) がある。

また、ベルガンティ (2012) は、このステークホルダーのネットワークやコミュニティにおける様々な意思疎通・叙述・実践活動等の相互作用を「デザイン・ディスコース」と呼び、デザインの成功の鍵はデザイン・ディスコースの良否にあると述べる。さらに、特にデザイン・ディスコースにおいて主要な解釈者 (モノに意味を与える = デザインの意味を解釈する者) を特定し、耳を傾け、引きつけることが重要な鍵を握ると主張している。「IR とは何か、IR は何に対して、何を明らかにすることができるのか」という問いは、「IR にどのような意味を与えるか」という問いに読み替えられ、その「意味」は、IR に関わる多様なステークホルダーのネットワークやコミュニティでの相互作用 (ディスコース) において生起するものと考えられる。よって、このフェーズで重要だと思われるデザイン研究の知見は、(1) モノの意味とは社会的・文化的な制約を受けるため、誰か特定の者が一義的に定義することはできず、それぞれに異なった潜在的に矛盾している興味を持つステークホルダーのネットワークやコミュニティにおけるデザイン・ディスコースにおいて生起する。よってその関係調整という役割がデザインにとって重要なものとなる、(2) デザインの成功の鍵は、デザイン・ディスコースの良否にあり、特にデザイン・ディスコースにおいて主要な解釈者を特定し、耳を傾け、引きつけることが重要な鍵を握る、の2つにまとめられる。

以上、縷々検討したように、デザイン研究の成果から本稿の分析視角を設定するためのより具体的な知見が抽出された。大学という組織における IR の開発及び可視化の追究では、潜在的に矛盾しているアクターたちの多様な視点をどのように協議するかが本質的かつ重要な課題であり、それゆえこれらデザイン研究の知見を手がかりとすることが有効だと考えられる。

3. 立命館大学における教学 IR の開発及び展開

3-1. データに基づく教学マネジメントの促進

前章において示されたデザイン研究の知見に基づく分析視角を用い、教学 IR の開発及び可視化のプロセスを検討するにあたって、以下ではまず、立命館大学における教学 IR の特質を検討していく。立命館大学の「学びの実態調査」は、2012 年度で第 4 回の実施を迎える。2009 年度の第 1 回調査の実施以来、調査項目の洗練化が段階的に行われ、大学の「入り口」と「出口」における学生実態の把握のための新入生調査と卒業生調査が企画・実施されるようになり、実施学部及び調査対象学年が漸次拡大している⁸⁾。調査開始当初は IR プロジェクトと学部との協働から始まったが、こうした学生の学びに焦点をあてた「学びの IR」のアプローチの充実と規模の拡大に伴って、IR プロジェクトと学部以外の部局との協働の機会も増えつつある（鳥居ほか、2012）。その一例に、学生へのキャリア支援を提供するキャリアオフィスとの協働が挙げられる。既に、「学びの実態調査」は第 1 回調査の初期設計段階においてキャリアオフィスとの協議を経ており、同オフィスが主管・実施する「卒業生・修了生」アンケートにおける設問項目との関連性について検討がなされていた。両調査はいずれも対象学生に学籍番号の記入を求めているため、データ収集後に 2 つの結果を対応づけることが可能である。こうした条件の下、学生の在学中の学びと卒業時点における進路という学習成果との関連性を明らかにするための分析が実現した（Torii & Kawanabe, 2012）。

第 2 に、個々の学生の経年的な変化の分析に堪え得るデータが 4 年間で蓄積されてきたことに伴い、データの管理や運用に関する情報システム課との協働が進められている⁹⁾。ここでは、情報システム課が保有している知識として、学内のどこに、どのような種類のデータが、いかなる形式で蓄積されているのかについての情報が IR プロジェクトに提供される。かたや IR プロジェクトは、教学マネジメントにかかわる顕在的、潜在的なニーズを示し、それに応じるために必要となるデータ内容や分析時に活用しやすいデータ形式についての情報を提供する。こうした知識の相互提供を通じて、各部局が有しておくべきデータや改善すべき点等を明らかにしつつ、より有効なデータベースの構築に向けて検討が重ねられている。学内の各所に散在しているデータを整理し、活用可能な形にしておくことは、今後の IR 活動を安定的に支える条件を整え、さらに高度な分析を可能にする基盤を強固にし得る。

上記のような連携の拡大だけではなく、IR プロジェクトと学部との対話も開発当初に比して大きく展開されるようになってきている。たとえば、「学びの実態調査」を拠り所とした理工学部との対話から、既存の調査のみでは明らかにできない要因に関して、協働という形で新規調査を企画・実施するという実践が行われた（笠原、2012）。同調査の企画・実施において特筆すべきは、IR プロジェクトないし教育開発支援センターの側からではなく、理工学部の側からディプロマ・ポリシーにかかわる明確なリサーチ・クエスチョンが出され、実際の面接調査の場にも同学部執行部の教員が参加したことである（笠原、2012）。カリキュラムや授業改善に関する専門性及び調査、分析に関する専門性を備えた IR プロジェクトと、学部の学習・教授の文脈に精通している教員とが共に調査を実施することによって、双方にとって意味のある示唆がもたらされた。具体的には、学部側は成績の上位層及び下位層の学生の学びの実態をより正確に把握することがで

き、より実効的な教学システムの構築に向けて、リメディアル教育や初年次教育の充実を図るための根拠資料が得られたことである。なおかつ、IR プロジェクト側は、教育改善に資するデータの収集及び分析の枠組みの整備を進めることができた。これは、立命館大学の IR プロジェクトが FD 活動を支援する教育開発推進機構教育開発支援センター内に位置することにも起因していると考えられる。この他にも、学内で新規に開始されるプログラム（文学部「キャンパス・アジアプログラム」）の効果検証にかかわる調査の設計や、効果検証の方法を予め科目設計に組み込んだ初年次科目（薬学部）の開発等、「学びの実態調査」の延長線上で教学 IR に基づく教育の質向上の実践が展開を見せている¹⁰⁾。

3-2. 教学 IR のコンセプト共有にむけた可視化

これまで見てきたように、立命館大学の「学びの実態調査」を軸とした IR プロジェクトの取り組みの展開は、教学にかかわるさまざまなアクターとの「対話」に基づく。対話を通じて、各アクターが有している問題関心を具体的な学生のデータを素材として明確化し、介入点を特定したり、仮説を検証したりするために必要なデータや分析観点を共有していく。さらに、データの分析結果についての解釈を共に行っていく中で、教育改善への道筋を描いていく。こうした一連のプロセスを考えると、IR プロジェクトだけでなく、関与しているアクターもまた、リサーチ・クエスションの発見、調査の設計、調査の実施、データの分析、結果の解釈といった教学 IR の各局面について意識を向けることになる。つまり、IR プロジェクトと各部署との「対話」そのものが、教学 IR のコンセプトが学内で共有される機会になっていると言える。

とりわけ教学 IR の可視化においては、実際のデータに基づく「対話」を通じたコンセプトの共有以外に、IR の取り組みの成果を関係者にレポートしていくことが重要である。立命館大学の IR プロジェクトによるレポートは、主に、(1) 学部執行部へのレポート、(2) 全学へのレポート、(3) 大学執行部へのレポート、の 3 つに分類される。

教学マネジメントにおけるミドル・マネジメントに相当する学部執行部へのレポートとしては、「学びの実態調査」の分析結果のフィードバックを中心に行っている。データの分析に関しては、高等教育研究の領域で確立された理論やモデルに基づいた分析だけでなく、学部側の問題関心を加味した分析も行う。このレポートは、上述のように「対話」を重視していることもあり、一度かぎりのフィードバックで終わることはなく、複数回繰り返される。具体的には、基礎集計結果を提供する第一次フィードバック、IR プロジェクトが設定した標準分析方針による結果の第二次フィードバック、学部のニーズに応じた分析結果の第三次フィードバックである。また、レポート資料のグラフや表のレイアウト、そこに含めるべき情報等も、アクターの意見を反映させながら段階的に洗練化が進められている。

全学へのレポートとしては、IR プロジェクトが作成・発行（学内限定）する「学びの IR レポート」が挙げられる。このレポートは、立命館大学生の学びにかかわるデータや情報を共有し、「学びのコミュニティ」の成長について、全ての学生及び教職員が共に考えていく契機となることが目指されている。レポートは図 1 のようなイメージで、立命館大学の情報端末利用者 ID を持つ学生・教職員であれば誰でも Web 上で閲覧することができ、2013 年 1 月時点で 11 号まで発行されている。レポートの内容構成は、立命館大学の学生、教職員から出され

たさまざまなりサーチ・クエスチョンに対して、「学びの実態調査」の結果や成績等の教務データ、留学生や奨学金受給学生にかかわるデータに基づきながら応答するという形式をとっている。IR プロジェクトが独自に考案したりサーチ・クエスチョンではなく、学生や教職員の実際の関心に基づくという点で、レポートで扱われている内容は学内のアクターらに親近感を抱かせ、なおかつ感覚的に納得しやすいものになっていると言えよう。また、誰にとっても分かりやすく、目を引くものにするため、IR プロジェクト内の「対話」を超え、多様なアクターとの「対話」を重ねながら、適切な用語の用い方や図表の示し方等の可視化の手法の高度化が目指されている。

しかしながら新たな課題も見えてきている。筆者らが担当する授業で実施した学生アンケートでは、「グラフや表がカラフルで見やすい」や「肌感覚に合う内容で理解しやすかった」といった、視覚表現を肯定的に評価する記述が多く見られた¹¹⁾。その一方で、「これまでの学びの振り返りに役立ったか」という問いと、「今後の学びに役立つか」という問いのいずれにおいても、否定的な回答が約6割を占めた(図2、図3)。ここから、視覚表現の点に関しては概ねユーザー側の視点に立てていると見せるものの、特に学生の視点に立ったレポート内容についての吟味とフィードバック情報のさらなる収集の強化が課題であることが示唆された。

最後に、大学執行部へのレポートである。教学 IR に基づく意思決定を促進していく上で、教学のトップ・マネジメントに対して、学生の学びの実態を報告することは不可欠である。学びの実態調査の第4回サイクルを迎え、総長と IR プロジェクトの「対話」の機会が設けられ、トップ・マネジメントの視点から、「学生の高校までの学びと大学での学びとはどのような関連

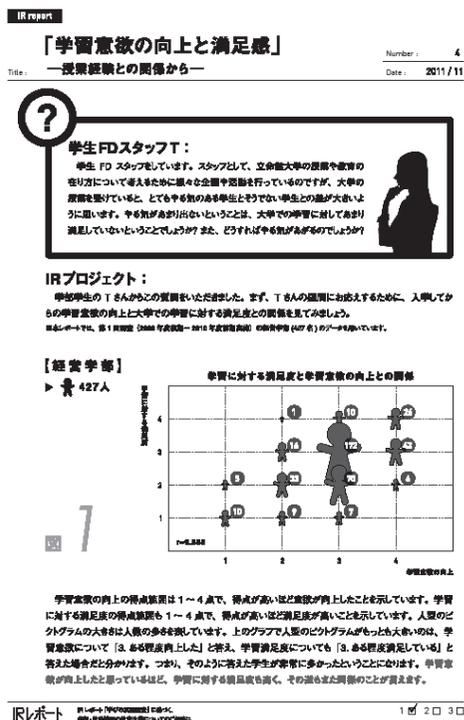
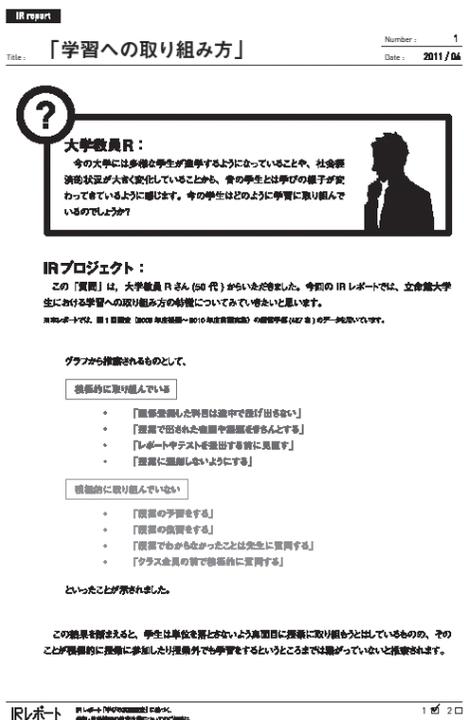


図1 「学びの IR レポート」のイメージ

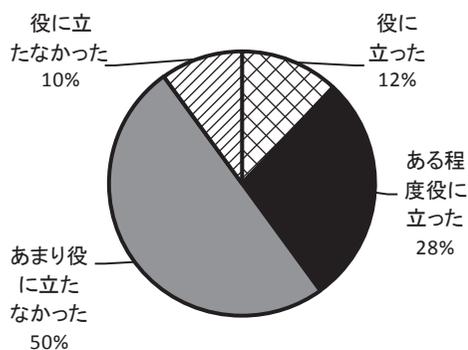


図2 IRレポートに関するアンケート結果

(「レポートはこれまでの学びの振り返りに役立ったか」に対する回答者の割合)

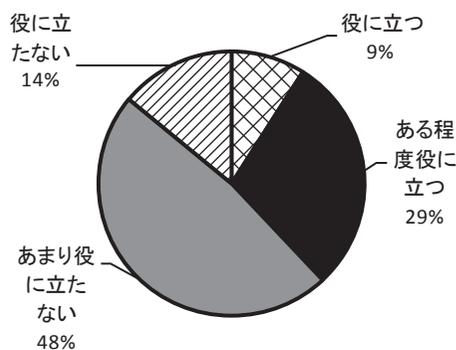


図3 IRレポートに関するアンケート結果

(「レポートは今後の大学での学びに役立つか」に対する回答者の割合)

があるのか?」というリサーチ・クエスチョンが提出された¹²⁾。また、教育学部執行部からは、その時々課題に即したアドホックな分析依頼が出されている。たとえば、特定の入試方式で入学した学生の学業成績の変化に対し、そうした学生の学習スタイルに注目して、学生支援策の検討材料を得ること等である¹³⁾。さらに、全学の副学部長や副研究科長と教育開発推進機構のメンバーが参集するFD懇談会の場において、2012年度後期に「学びの実態調査」の報告がなされた¹⁴⁾。ただし、現時点においては、教学のトップ・マネジメントへのレポートの機会が安定しているとは言い難く、今後はレポートの連携体制を緊密にしていけることが求められる。

4. 考察及び結論

4-1. 教学 IR の開発及び可視化プロセスの特質

以上、立命館大学における教学 IR の開発及び可視化のプロセスについて概観してきた。その有効性や評価すべき点、限界点及び今後の課題等の特質はどこにあるのか。本章では、IR の可視化の3つのフェーズとそれにかかわるデザイン研究の知見に即した分析視角に基づき考察する。

第1に、IR に関する調査にて得られたデータの解釈が行われるフェーズ (Data の Interpretation) である。ここで利用可能なデザイン研究の3つの知見を教学 IR の文脈に引き寄せれば、データの分析結果をアクターと共有することによって、アクター側の問題関心を引き出し、さらにそれに基づいた新たな分析を行い、再び結果を共有することの重要性が示された。立命館大学の教学 IR の取り組みでは、「学びの実態調査」は設計から、分析、結果の解釈に至るまで、全てのプロセスにおいて、データを介した学部との「対話」が往復的に行われている。つまり、具体的なデータとして示された学生の学びの実態の分析結果 (プロトタイプ) を学部と共有することで、IR プロジェクトによる一義的な結果の解釈を避け、実際の教学の場面に精通している学部側の問題関心 (二次的理解) を引き出すことに成功していると言える。一方、デザイン研究の知見で指摘されているプロトタイピングの迅速さについては今後の課題の1つであり、より速やかな調査結果の受け渡し求められる。

第2に、IRに関する取り組みの公開と共有を行うフェーズ（ProjectのImplication）である。ここで利用可能なデザインの3つの知見は、レポートを受ける側の視点に立ち、常に洗練化を繰り返すことの重要性であった。立命館大学の事例を見れば、学部との「対話」は必要に応じて繰り返し行われていることから、機関のミドル・マネジメントに相当する学部執行部からの「フィードバックの収集」は「学びの実態調査」の開始期に比して大きく充実してきていると言える。また、全学に向けて発信されている「学びのIRレポート」に関する学生からのフィードバックの収集も実施されつつあるが、公開と共有をさらに強化する必要性が確認された。

第3に、IRとは何か、IRは何に対して何を明らかにすることができるのかを追究するフェーズ（VisionのConceptualization）である。ここで利用可能なデザイン研究の2つの知見は、まさに立命館大学の教学IRが重視しているアクターとの「対話」を指す。しかし現時点では、個々の学部とIRプロジェクトという、あくまでも二者間での「対話」にとどまっている。個々の学部とIRプロジェクトという二者間の協働を通じて、教学IRのコンセプトは徐々に浸透しつつあるものの、学部の壁を越えた複数部局による横断的な「対話」はいまだ実現されていない。今後、IRプロジェクトが提供する学生の学びの実態に関するデータを軸として、各学部やオフィス、センター等、異なるミッションを持つ複数の部局が互いの視点を共有していくことで、局所的ではない、面としての広がりを持った全学的な教学IRのコンセプトの可視化が期待される。

4-2. まとめと今後の課題

もとより、高等教育の質保証の課題の下で大学の教学マネジメントに関与するアクター及び組織は多様で重層的であり、なおかつ個々のアクターの立場や利害は一律ではない。そこでは、潜在的に矛盾している、アクターらの一致しない視点をどのように協議し調整するかが重要な課題の一つになる。立命館大学の事例検討においては、内部質保証のアクターらのさまざまな関心や思考を、「学びの実態調査」という学習成果測定ツールによるデータで凝集し、具体的な教学改善への道筋をつけていく上で、デザイン研究の知見を補助線として教学IRの開発及び可視化のプロセスを読み解いていくことに一定の有効性を認めることができた。とりわけ、IRの可視化で重視すべきは、データの美的な見せ方に終始する狭い議論ではなく、様々なアクターの利害関係調整プロセスに適合するデータの提示と利用方法の検討であった。これは、情報伝達における単なる表示方法や様式の巧拙を超え、学内の情報活用の一翼を担う人的ネットワークの構築を意識したAIR（2009）のアプローチとも合致している。こうした視座によって、IRの機能への理解を観念的なレベルに留めるのではなく、現場に根差した実質的な問題と切り結んだ形で可視化し広く伝達することで、データや情報に接するアクターらの当事者意識を喚起していくことが期待できる。その際、現段階の立命館大学の教学IRの開発と可視化のプロセスにおいては、学部執行部等のミドル・マネジメントとの関係調整に比重が置かれていることをふまえ、今後はトップ・マネジメントとの連携強化を念頭においたDataのInterpretation、ProjectのImplication、VisionのConceptualizationのあり方を追求し、教学IRを開発していくことが実践的課題となる。それらと並行して、ミドル・マネジメントに対するDataのInterpretation、ProjectのImplication、VisionのConceptualizationと、トップ・マネジメントに対するそれらとの異同を理論的に解明することが基礎的な研究課題となる。

本研究は一大学の事例に基づく考察であり、その結論は自ずと限界を有する。他機関の IR の開発及び可視化のプロセスにおけるデザイン研究の知見の適用の有効性を検証することが残された課題である。個々の機関の取り組みを諸条件の下で共有し考察を積み重ねていくことが、迂遠なようではあるが、日本の大学における教学マネジメント及び IR の高度化に資すると考えられる。さらに、内部質保証を支えるアクターらの理解に資する IR の可視化とともに、対外的な大学情報の可視化と公表のあり方を検討する必要がある。高等教育の質保証は、外部質保証と内部質保証とが対になってこそ実現され得るからだ。とりわけ、大学の教育情報に関しては、説明責任としての公表のあり方と、学内外における活用のあり方の異同を見極めつつ、公表と活用とを一体的に推進していくことが求められる。今後の研究課題としたい。

謝辞

立命館大学の「学びの実態調査」をはじめ、教学 IR の開発にご協力下さったすべての方々に御礼申し上げる。

注

- 1) 本研究における「教学マネジメント」とは、ひとまず、機関の目的に即した学習・教授にかかわる活動の総体によって学習及び教育の成果を追求する組織的な営みを意味する。
- 2) ここで言うアクターとは、内部質保証を実現し得る主体を意味する。
- 3) このようなユーザーをデザインプロセスの中心に据えることで、適切で使いやすい商品やサービスの提供をめざす手法は「ユーザー中心デザイン (User-Centered Design)」と呼ばれる。ユーザーの調査、プロトタイプ作成、ユーザー参加による設計、の評価のサイクルを特徴とし、「デザインする」ことと「ユーザーからのフィードバックを収集する」ことを反復しつつ開発作業を行う。詳細は山崎ほか(2004)を参照のこと。また、ここでのプロトタイプとは、アイデアや探索内容を頭から出して物質世界に落としこむもの全てを示し、ポストイット、ロールプレイング、空間や物、インタフェースからストーリーボードまで、物質的な形を取るものであれば全てプロトタイプとされる。詳しくはスタンフォード大学 ハツ・プラットナー・デザイン研究所(2012)を参照のこと。
- 4) よって、本稿は IR そのものの分析に新たな視点を適用する試論の性格を強くはらむ。その意味で、デザイン研究以外の領域からの IR へのアプローチの可能性を排除するものではない。
- 5) 同調査は、当時先行していた他大学での実践や研究の知見(鳥根大学、Benesse、豪州の CEQ 等)を参考に設計され、主要な調査項目として、授業外の学習時間、授業経験、授業への取り組み方、正課を通じた成長感等が設定されている。詳細は宮浦ほか(2011)を参照。
- 6) ブラウン(2008)は「デザイン思考は見栄えのよさを超えて、イノベーションを導き出すことを論じてきた。ただし、スタイリングや美観が重要ではないと申し上げているわけではない」と慎重に留保している。
- 7) この点は、「ユーザー中心デザイン」や「デザイン思考」において共通に言及されている。
- 8) 2012年度前期中において、在学生調査12学部、新入生調査7学部、卒業生調査4学部を実施。なお、学びの実態調査は各学部にとって最適な実施時期が選択されるため、原則的に年間を通じて弾力的に実施されている。これまでの調査結果に基づく具体的な研究成果の一部については、岡田ほか(2011)を参照のこと。
- 9) 「第28回 IR プロジェクト・ミーティング資料」(2012年10月22日、内部資料)。

- 10) 同上。
- 11) 2012年5月から7月にかけて4つのクラスの授業時間内に実施。6学部の1～6年生、延べ382名が回答。全クラスでIRレポートの感想を尋ねているが、とくに「振り返りに役立つか」、「今後の学びに役立つか」の質問は、7月に調査を実施した2クラス（回答者202名）のみで尋ねている。
- 12) 「川口総長との懇談結果報告」（2012年10月22日、内部資料）。
- 13) 「第29回IRプロジェクト・ミーティング資料」（2012年10月29日、内部資料）。
- 14) 「第8回教育開発総合センター会議資料」（2012年10月22日、内部資料）。

参考文献

- Association for Institutional Research. *Effective Reporting*, second edition, 2009.
- Delaney, A. M. Institutional Researchers' Expanding Roles: Policy, Planning, Program Evaluation, Assessment, and New Research Methodologies, *New Directions for Institutional Research*, no. 143, Fall 2009, pp.29-41.
- Hoegg, J. & Alba, J.W., "Seeing Is Believing (Too Much): The Influence of Product Form on Perceptions of Functional Performance", *Journal of Product Innovation Management*, 28 (3), 2011, pp.346-359.
- Johne, A.F. & Snelson, P.A., "Success Factors in Product Innovation: A Selective Review of the Literature", *Journal of Product Innovation Management*, 5 (2), 1988, pp.114-128.
- Saupe, J. L.. *The Functions of Institutional Research, 2nd edition*. Tallahassee, FL:Association for Institutional Research, 1990.
- Swing, R. L. Higher Education Counts: Data for Decision Support. In OLSON, G., & PRESLEY, J. (Eds.) *The Future of Higher Education*, Paradigm Publishers., 2009, pp. 139-147.
- Torii, T. & Kawanabe, T. Students' Learning Experiences and their Outcomes: A Preliminary Study of its Relationship in Japan, *2012 IIAI International Conference on Advanced Applied Informatics*, 2012, pp.314-319.
- Townsend, J.D. & Montoya, M.M. & Calantone, R.J., "Form and Function: A Matter of Perspective", *Journal of Product Innovation Management*, 28 (3), 2011, pp.374-377.
- 岡田有司・鳥居朋子・宮浦崇・青山佳世・松村初・中野正也・吉岡路「大学生における学習スタイルの違いと学習成果」『立命館高等教育研究』第11号、2011年、167 - 182頁。
- 岡田有司・鳥居朋子「私立大学における大学生の学習成果の規定要因－ユニバーサル・アクセス時代における多様性と質保証の観点から－」『京都大学高等教育研究』第17号、2012年、15 - 26頁。
- 沖清豪・岡田聡志（編著）『データによる大学教育の自己改善－インスティテューショナル・リサーチの過去・現在・展望－』学文社、2011年。
- 笠原健一「理工学部の学位授与方針とそれを実現するための個に応じた教学システム」『立命館高等教育研究』第12号、2012年、29 - 39頁。
- クリッペンドルフ、クラウド、小林昭世ほか（訳）『意味論的転回 デザインの新しい基礎理論』エスアイビー・アクセス、2009年。
- ケリー、トム・リットマン、ジョナサン、鈴木主税・秀岡尚子（訳）『発想する会社！』早川書房、2002年。
- スタンフォード大学ハッソ・プラットナー・デザイン研究所、柏野尊徳（監訳）、木村徳沙・梶希生・中村珠希（訳）「プロトタイプ」慶應義塾大学SFCデザイン思考研究会編『デザイン思考家知っておくべき39のメソッド』（<http://kashinotakanori.com/bootleg/> 2012.10.26）、2012年。
- 東北大学高等教育開発推進センター（編）『教育・学習過程の検証と大学教育改革』東北大学出版会、2011年。
- 鳥居朋子「立命館大学における教学領域のIR」『IDE 現代の高等教育』No.528、2011年、43 - 47頁。
- 鳥居朋子・川那部隆司・石本雄真「教学IRの可視化（見える化）は何のため？」『ITL News』No.24、2012年、1 - 3頁。

- 鳥居朋子・八重樫文「ラウンドテーブル 内部質保証システムを支える IR の可視化」京都大学第 18 回大学教育研究フォーラム（企画：鳥居朋子・八重樫文、司会：鳥居朋子、指定討論：八重樫文、話題提供：山田剛史・森雅夫・山本以和子・内村浩・川那部隆司・岡田有司・青山佳世・南浦聡介・川口玄）、2012 年 3 月 16 日。
- 鳥居朋子・山田剛史「内部質保証システム構築に向けた教学 IR と FD の連動」『大学教育学会誌』第 32 巻第 2 号、2010 年、39 - 42 頁。
- ハワード、リチャード・D（編集）、大学評価・学位授与機構 IR 研究会（翻訳）『IR 実践ハンドブック：大学の意思決定支援』玉川大学出版部、2012 年。
- ブラウン、ティム「人間中心のイノベーションへ IDEO：デザイン・シンキング」『DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』12 月号、ダイヤモンド社、2008 年、56 - 68 頁。
- ベルガンティ、ロベルト、佐藤典司（監訳）、岩谷昌樹・八重樫文（監訳・訳）、立命館大学経営学部 DML（訳）『デザイン・ドリブン・イノベーション』同友館、2012 年。
- 宮浦崇・山田勉・鳥居朋子・青山佳世「大学における内部質保証の実現に向けた取り組み—自己点検・評価活動および教学改善活動の現状と課題—」『立命館高等教育研究』第 11 号、2011 年、151 - 166 頁。
- 八重樫文「内部質保証システムを支える IR の可視化」[指定討論]、京都大学第 18 回大学教育研究フォーラム、2012 年 3 月 16 日。
- 山崎和彦・松田美奈子・吉武良治『使いやすさのためのデザイン ユーザーセンタード・デザイン』丸善株式会社、2004 年。
- 山田剛史「愛媛大学における可視化—組織間コミュニケーションの可視化と人材育成—」[話題提供]、京都大学第 18 回大学教育研究フォーラム、2012 年 3 月 16 日。

A Study on the Process of Development and Visualization of Institutional Research for Management of Learning and Teaching at Ritsumeikan University:
Using Findings of Design Study as Analytical Viewpoints

TORII Tomoko (Professor, Institute for Teaching and Learning, Ritsumeikan University)

YAEGASHI Kazaru (Associate Professor, College of Business Administration, Ritsumeikan University)

KAWANABE Takashi (Lecturer, Institute for Teaching and Learning, Ritsumeikan University)

Abstract

The purpose of this study is to investigate the process of development and visualization of Institutional Research (IR) for management of learning and teaching. This study uses the findings of studies on design about formative activities and negotiates diverging perspectives as the viewpoint of analyzing IR, difficult to define unambiguously. In particular, this study is focusing on three phases of the process of development and visualization of IR at Ritsumeikan University. They are the interpretation of data in IR, the implication of project in IR, and the conceptualization of vision in IR.

As a result of examination, the process of development and visualization of IR at Ritsumeikan University succeeds in raising faculty's research interests as an actor of learning and teaching management, "second-order understanding" in design study, through the intermediary of data of the Student Survey (*Manabino Jittai Chosa*). Specifically, this success is achieved by "repetition" and "prototype", that is, building the reciprocal dialogue between faculty and IR project and sharing the result of analysis of student learning outcomes assessment.

Keywords

Institutional Research, Management of Learning and Teaching, Learning Outcomes Assessment, Process of Development of IR, Process of Visualization of IR, Design, Ritsumeikan University

